



ひまわり通信

2023年5月号

前は、「種」についての配信でしたが今回は、「除草」や「草」について書いていきたいと思います。さて草と言えばNHK連続テレビ小説「らんまん」ではないでしょうか。

牧野富太郎博士は2500種以上の植物に命名し、自らの新種発見も600種余り、日本の植物分類学の父とされています。

「草」をまとめて「雑草」と言う時があると思いますが、よく調べれば多種多様な草がある事に驚かされます。雑草という草はありません。

草の植生は、土中の酸度や水分量によって生える場所が異なったりすることから、草を見て判断することができます。

今主流の慣行農法（各地域で農家の多くが実践する農作物の栽培方法）では、草は何かと嫌われています。刈っても刈っても生えてくる。せっかく入れた肥料が草にとられてしまう。作物が育たなくなってしまうなど様々あり、確かにその通りです。

「病虫害防除対策と土作り」（監修、後藤逸男、草間祐輔編、万来舎発行最新版）によると、作物は肥料を与えないと育ちません。道端や空き地に生える雑草が肥料を与えていないのに旺盛に育つわけは、雑草は枯れると土に還りますが、そのときに雑草が吸収した養分も土に戻るからです。枯れた草は土の中の小動物や微生物によって分解され、養分となって土中に蓄えられます。春に新芽を出した雑草は、その養分を使って生長します。つまり、雑草（植物）と土との間で養分が循環しているのです。一方、畑で作る作物の場合は、このサイクルに人間が関わります。養分のかたまりである収穫物を人間が取り上げてしまうので、土は養分不足になってやせてきます。土の中の養分は量が限られているので、新たに補給しないと生育が悪くなるばかりです。そのため、人の手で養分を補う必要があります。これが肥料、いわば植物のごはんです。英語では肥料を（プラントフード）とも呼びます。

「自然農の始め方（草刈り編）」（現代農業2022年7月号）が掲載されていたので、こちらを紹介したいと思います。

【自然農は草刈りがすべて】

自然農がなかなかうまくいかない人たちに共通の勘違いが「不除草」である。「不除草」を「草を刈ってはならない」と誤解されているのだ。言葉のイメージが独り歩きしている。実際、自然農の職人たちはこまめに草刈りをしている。しかもただ行っているわけではなく、季節や天気、植物に応じて草の刈り方を使い分けている。草刈り一つで生長を早めたり、病気がおさまるところを何度も見てきた。だから私は「自然農は草刈りがすべてだよ」と話している。

【自立根圏には草を生やさない】

草の刈り方は主に以下の三つである。(下図参照)

1、地際狩り

自立根圏の広さはタネ袋の裏を見ればわかる。「株間30cm」と書いていれば30cm四方が自立根圏にあたる。自然農の場合は根が深く張るので1～3割増しの広さを地際狩りするのがおすすめだ。タネを蒔くときや苗を定植するときに、事前に自立根圏を地際狩りして、刈った草を草マルチ(マルチとは畑のうねをビニールシートなどで覆うこと)にすることでむやみに草を生やさないようにする。

ただし、梅雨入り以降は草マルチを厚くしすぎると病原菌(カビ菌)が発生しやすいので天気に応じてマルチの量を減らすことを忘れてはならない。

【通路は高狩りで細根を増やす】

2、高狩り

ウネ肩や通路の雑草に対して行う。20～30cm程度に刈り、少し大人しくしてもらいたいイメージだ。理由は二つある。一つは地際狩りをしてしまうと、生長点(植物の茎と根の先端にあって、細胞の増殖、器官形成といった顕著な形成活動を行う部分)が高い双子葉類の草がいなくなり、生長点が低い夏草(イネ科の食物)ばかりが生えてきやすくなる。夏草は生命力が旺盛でかつ回復力に富んでいるので、すぐに伸びて草刈りの回数が多くなってしまう。

もう一つの理由は、草の側根を増やして微生物を殖やすためだ。根は菌根菌などの微生物と共生関係を結ぶ。つまり、高狩りをすると植物の根量が増えて、土中の菌根菌も増えるのだ。

【養水分が奪われないための根切り】

3、根切り

これは主に、自立根圏内に入ってくる草などの根に対して行う。

【光、風、水をコントロールする】

また草刈りをすることで、光合成や呼吸、土壌水分を調整することができる。

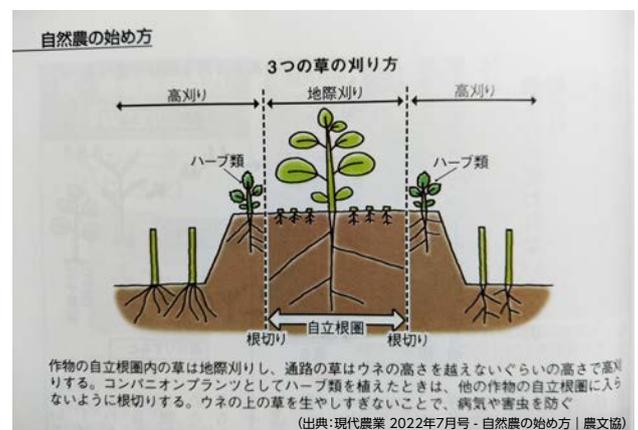
特に自然農では菌根菌との共生関係を結んで養分をまかなうため、その菌根菌に提供する糖分を作り出す光合成が十分に行わなければならない。植物は葉裏の気孔の開閉でしか呼吸量を調整できない。このため、風が呼吸の助けになる。風が強すぎると茎を太くし、栄養を使ってしまう。逆に風が弱いと、カビ菌が発生しやすくなるばかりか、虫が集まってしまう。草刈りすればそよ風が通り、病害虫を防ぐことができる。

草刈りは土壌水分の調整もできる。高狩りした草の側根は菌根菌と共生関係を結んで、菌糸ネットワークの養分だけでなく、水分も根圏以上の範囲から集めてくれる。

そのときの季節や作物の性質に合わせて草刈りのやり方を変えていくことが大切である。

慣行農法は草も虫も敵としますが、自然農では草も虫も敵としません。必要なものはすでにそこにあります。ひまわりを通して何か大切なものに気付いていただけたら幸いです。

*菌根菌(きんこんきん): 菌根を作って、植物と共生する菌類。



次回は「生育」について配信していきたいと思ひます。

—連絡先—

NPO 法人シャローム「ひまわりプロジェクト」実行委員会

〒960-8141 福島県福島市渡利字鳥谷下 67-1

(ベーシック憩内) 担当:野内・穴戸・杉山

TEL:070-5474-4166 FAX:024-529-6902

Mail:info@nposhalom.net

HP:http://www.nposhalom.net/himawariproject/



GOOD
DESIGN
AWARD
2015



編集:NPO 法人シャローム「ひまわりプロジェクト実行委員会」